

■「惣大行事日記（文久三年）」より「鹿島丹下の帰職運動」

### 3. 文久三年五月二十六日 藤四郎祢宜が幕府への使者に内定

（五月）廿六日 昼前雨天 夫方晴

今夕神野方手紙来。先日御書面之処、御返書も上不申、失礼御免可被下候。然者御頼之伺入用筋之義、今日参会ニ而大隅殿方も貴所様御頼通り、此度者両所名前ニ而三両金差出候積り可然旨、手前へ談有之候間、其通り可然旨及挨拶、則右之段年番へ及披露候処、一同否無之、仍而出府之処者、大祝留守中故、藤四郎祢宜出府之積り、荒増決着相成、尤藤四郎申候ニ者、三両老ケ月ニ而者不足之由申之候ニ付、跡老両金両所方貴所様へ御助合申、藤四郎へ者、四両金相渡候積りニ御座候。此段御内々申上候。尤少々之義ニ候得共、桜山へ右御挨拶御頼之御使を被遣候処可然。此段愚意ニ御座候得共、申上候由之本文。其外端書家内へ伝聲申来。右及返書候者、段々願之義ニ付御心配忝、今日参会ニ而御取斗之趣、委細被仰聞、承知いたし候。三両之外老両者御両所方御都合可被下趣、甚不相濟事ニ御座候。何レ罷出御礼旁可申上候。猶又桜山へ挨拶之義被仰聞、御尤ニ致承知候趣礼申遣ス。端書之返答並家族方伝聲之趣相認候。控別紙有之。

一、右書面之義ニ付、桜山へ惣三郎遣し可申と存人遣候処、惣三郎方へ桜山方呼ニ参り、罷出候由ニ而、桜山方帰り直様此方へ来。右神野方書面之趣ニ相違無之、尤出府之義者、大祝留守旁睨与取極り不申、四五日中又々参会之積りニ而、退席被致候由也。桜山ニ而大隅殿惣三郎ニ直談之由也。